

都市の水辺再生における地域環境スチュワードシップと関与型水系基盤の計画マネジメント手法に関する研究

滝澤, 恭平

<https://hdl.handle.net/2324/5068208>

出版情報 : Kyushu University, 2022, 博士 (工学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

氏 名 : 滝澤恭平

論 文 名 : 都市の水辺再生における地域環境スチュワードシップと
関与型水系基盤の計画マネジメント手法に関する研究

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

都市の水辺では、市民活動として河川愛護活動や生物観察等が行われ、水辺の計画や管理への市民の参加、行政等との協働が進められてきた。しかし水辺の環境や景観の再生、管理運営では、市民がより継続的に主体的に関わるための概念や方法論が希求されている。環境保全・再生の分野では、主体性、内発性に基づいた行動を伴う取り組みである「スチュワードシップ」概念が注目され、様々な活動や政策が登場している。本論文は、都市の水辺再生においてスチュワードシップ概念を導入し、地域の主体が水循環のネットワークと利用を支えるインフラストラクチャーである「水系基盤」に関与するプロセスと、その計画マネジメント手法について論じたもので、全体として5部10章から成っている。

第1部は、「研究の背景、および目的と方法」である。第1章では、都市の水辺の現状、日本の水辺環境政策の変遷、市民参加の現状を踏まえた都市の水辺再生における課題と展望を整理した上で、市民の主体的な水系基盤への関わりからの必要性から「関与型」の水系基盤の仮説と、市民の主体的なプロセスを分析する枠組みとしてスチュワードシップ概念を提示している。第2章では、リサーチ・クエスチョンとして、(i)地域環境スチュワードシップの概念と意義の把握、(ii)地域環境スチュワードシップの都市の実空間への発現形態の把握、(iii)地域環境スチュワードシップに基づいた都市の実空間の計画マネジメント手法の提示を示した上で、研究方法として文献調査とアクションリサーチ、研究対象として3事例の抽出を示している。

第2部は、「地域環境スチュワードシップと関与型水系基盤の概念把握」と題し、研究の問いの(i)に対応している。3章では、スチュワードシップの研究動向を整理し、地域スケールのスチュワードシップの有効性を確認し、地域環境スチュワードシップの定義を示している。また、地域環境スチュワードシップの構成要素として、社会的・生態的背景、動機、地域資本活用能力、行動、結果から成るフレームワークを提示した。さらに、近接概念との比較、都市の地域環境スチュワードシップの特徴を抽出している。4章では、関与型水系基盤の定義を行い、本概念の傍証としての適用事例を提示し、水辺とまちの再生、合意形成、グリーンインフラ、河道内自然再生など関連分野の既往研究を整理している。

第3部は、「都市の水辺再生における実践事例結果」であり、研究の問い(ii)と(iii)の具体的なデータ提示に対応し、3つの実践事例結果を示し、事例ごとに地域環境スチュワードシップの構成要素を構造化し、水辺再生プロセスを明らかにした上で、地域環境スチュワードシップと計画マネジメントに関する考察を加えている。5章では市民組織の事務局長として参画した善福寺公園内水路再生の実践の分析を通して、計画マネジメント手法として、協働が重層する場としての「川しらべ」、多世代共創による地域課題解決能力の獲得、地域知と専門知を橋渡しする市民組織の存在を明らか

にした。6章では、筆者がファシリテーターとして関わった横浜市帷子川での河道内自然再生としての石組み水制づくりを踏まえ、計画マネジメント手法として、経験に基づいた学びの実践共同体の導入、参加・協働と計画検討の応答的プロセスマネジメント、河川の営力を踏まえた河川環境デザイン、市民が川づくりに関与するための技術を明らかにした。7章では筆者がファシリテーションを行った横浜市白根地域での市民間協働による小流域グリーンインフラ計画策定を通して、計画マネジメント手法として、地域の小流域スケールの水循環と地域課題を重ね合わせる可視化手法、住民の関心が高いインタレストに焦点化した目標設定の検証プロセスを明らかにした。

第4部は、「地域環境スチュワードシップの発現実態と計画マネジメント手法」と題して、実践事例結果を踏まえた上で、研究の問い(ii)と(iii)を総合的に考察し一般化を行っている。8章では、第一に、都市における水辺再生の地域環境スチュワードシップのプロセスが、地域住民の無関心から1)長期的な地域主体醸成、2)ビジョン創出、3)計画検討、4)運営主体確立を経て、5)管理者から一定の空間内で権限を委託された分権的関与の状態に至るステップとして展開することを明らかにした。第二に、3事例における地域主体の動機、地域資本活用能力を分析した上で、地域環境スチュワードシップの重要な要素として、水辺の風景の継承を通じたビジョン創出、地域の実践共同体による学びとしての「川しらべ」、橋渡し役の役割を明らかにした。第三に、分権的関与が水系基盤に組み込まれた関与型水系基盤の空間構造と水系システムを可視化した。その上で、関与型水系基盤の導入により、水系基盤のスケールを超えた地域環境スチュワードシップの拡張が発生していたことを明らかにした。9章では、地域環境スチュワードシップの推進を通じた関与型水系基盤の形成プロセスマネジメント手法として、参加・協働と計画検討の応答的プロセスマネジメント、橋渡し機能の導入、実践共同体による学びの場の形成、関与型水系基盤の段階的なスケール拡大のステップの4点を提示した。また、関与型水系基盤のデザイン手法として、中心的なインタレストの把握を通じた環境目標デザイン、表流水を媒介とした小流域デザイン、生息環境形成を契機とした関与の場のデザインの3点を提示している。

第5部は「総括」として、10章に本研究の研究成果をまとめ、結論を示し、研究の課題と今後の研究の展望を述べている。実践事例を基に理論的な考察を踏まえ、地域主体による継続的な管理運営、流域スケールの実践活動による水循環の再生に寄与する関与型水系基盤の計画マネジメントの方法論を提示し、実務の成果として有効性を示したことが本研究の大きな成果である。